

平成24（2012）年度
東京大学大学院学際情報学府学際情報学専攻
修士課程（文化・人間情報学コース）
入学試験問題
専門科目

（平成23年8月22日 14：00～16：00）

試験開始の合図があるまで問題冊子を開いてはいけません。開始の合図があるまで、下記の注意事項をよく読んでください。

1. 本冊子は、文化・人間情報学コースの受験者のためのものである。
2. 本冊子の本文は4ページである。落丁、乱丁、印刷不鮮明の箇所などがあった場合には申し出ること。
3. 解答用紙は4枚ある。第1問は、解答用紙1枚を使うこと。（裏面を使ってもよい）第2問は、選択した用語ごとに解答用紙1枚を使うこと。このほかにメモ用紙が1枚ある。
4. 解答用紙の上方の欄に、問題の番号（例：「第1問」）、選択番号がある場合にはその記号（例：「第2問(a)」）及び受験番号を必ず記入すること。問題番号、選択記号、及び受験番号を記入していない解答は無効とする。
5. 解答には必ず黒色鉛筆（または黒色シャープペンシル）を使用すること。
6. 第1問は日本語で答えること。第2問は日本語か英語で答えること。
7. 試験開始後は、中途退場を認めない。
8. 本冊子、解答用紙、メモ用紙は持ち帰ってはならない。
9. 次の欄に受験番号と氏名を記入せよ。

受験番号	
氏名	

文化・人間情報学 第1問 Question L1

次の(A)(B)2つの文章を読んで、問1から問3の質問に日本語で答えなさい。第1問全体（問1から問3まで）で解答用紙1枚を使いなさい。ただし裏面も使ってよい。

(A)

手はじめに、私の議論をできるだけ率直に述べて、その基礎と結果を検討するのがよいだろう。それは、こういうことである。すなわち、二つの認知作用、つまり二つの思考様式が存在し、それぞれは、経験を整序し現実を構築する特徴的な仕方をもたらしている。その二つは（相補的ではあるけれども）、おたがいに還元されえない。一方の様式を他方へ還元しようとしたり、事を全部一方に負担させておいて他方を無視しようとしたりする試みは、必ずや思考の豊かな多様性を捉えそこなうことになる。

さらに、それぞれの知り方の様式は、独自の作用原理と適格性の基準をもっている。それらは、検証の手続きにおいて根本的に異なっている。みごとなストーリーと、適格な議論とは、それぞれ異なった自然種である。両者は、それぞれ他方を信服させる手段として用いられる場合がある。しかし、それらが何を信服させるかという、その中味は基本的に異なっている。すなわち、議論はその真理性を信服させ、ストーリーはその迫真性を信服させる。前者は最終的に、形式のおよび経験的な証明をもたらす手続きに訴えることによって立証する。後者は、真理をもたらすのではなく、真実味をもたらすのである。前者は、後者を洗練したものであり、後者からの抽象だと言われてきた。しかしこれは誤っているか、またはなんら啓発的なものがない限りにおいて真であるか、いずれかにちがいない。

（中略）

より正確に事を進めるために、この二つの様式をすばやく簡単に特徴づけておこう。一方の様式、すなわちパラディグマティックないし論理-科学的なそれは、記述や説明にかんする形式的な数学的体系の理念を実現しようとする。それはカテゴリー化ないしは概念化を用いて、諸カテゴリーが確立され、例証され、理念化され、たがいに関係づけられて、一つの体系を形成するという作戦を用いる。カテゴリー結合用の全装備のなかには、形式的な面では連言と選言、上位概念と下位概念、厳密含意といったような考え方、それに一般的命題を特定の文脈における陳述から抽出する諸装置がふくまれている。全体的レベルで言うと、その論理-科学的様式（以下、これをパラディグマティックとよぶことにする）は、一般的な諸原因とそれらの立証とを扱っており、証明可能な指示的意味を確実なものにし、経験的真理を吟味するのに諸手続きを利用する。その言語は、一貫性と無矛盾性という必要条件によって規制されている。この領域は、その基礎的陳述が関係している観察可能なものによって定義されるが、そればかりでなく、論理的に生み出されうる、また観察可能なものに照らして吟味されうる、一連の可能世界によってもやはり定義される——つまり、それは原則にもとづいた諸仮説によって推進される。

パラディグマティックな思考様式についてわれわれはじつに多くのことを知っており、その仕事をつづけるのに役立つ強力な補助的諸装置、すなわち論理学、数学、諸科学、そしてそれら諸分野でできるかぎり骨が折れずにすばやく作動する自動装置などが、数千年にわたって開発されてきた。

パラダイグマティックな様式にかんしてはじめは苦手な子どもたちが、それを使う気になりさえすればかなり巧みになっていくわけだが、どのようにしてそうやってゆくかについて、われわれはまたかなり分かっている。パラダイグマティックな様式の想像力に富む適用は、よい理論、簡潔な分析、論理的証明、妥当な議論、理路整然とした仮説に導かれた経験的発見などをもたらす。しかしパラダイグマティックな「イマジネーション」(ないし直観)は、小説家や詩人たちのイマジネーションと同じものではない。むしろそれは、可能的な形式的諸関係を、なんらかの形式的な仕方では証明できるより前に、見る能力である。

物語の様式の想像力に富む適用は、それとはちがって、みごとなストーリー、人の心をひきつけるドラマ、信ずるに足る(かならずしも「真実」ではないとしても)歴史的説明などをもたらす。それは人間の、ないしは人間風の意図および行為、そしてそれらの成りゆきを示す変転や帰結を問題にする。それは、時間を超越した奇跡を経験の個別例へと翻訳し、その経験を時間と場所のなかに位置づけようと骨を折る。

(出典：ジェロム・ブルーナー『可能世界の心理』 みすず書房)

(原著：ACTUAL MINDS, POSSIBLE WORLDS by Jerome Bruner)

First published by Harvard University Press, Cambridge, MA and London, 1986

© The President and Fellows of Harvard College, 1986

Japanese translation rights arranged with Harvard University Press, Cambridge through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo)

(B)

一九六〇年代のはじめ、医学部の二年目と三年目に在籍していた私は、数人の患者に出会った。患者には、幼い者も老いた者もいたが、その病いの経験は強烈なもので、病いがわれわれの人生に対していかに密接で多様な形の影響を与えるかを示しており、私の関心を釘づけにした。

最初の患者は、七歳の痛々しい少女で、ほとんど全身におよぶ重篤な火傷を負っていた。彼女はうず巻く水の中に浸かり、皮がむけ広がった傷口から火傷組織をピンセットでひきはがす治療浴に連日耐えなければならなかった。この経験は彼女にとって恐ろしくつらいものであった。少女は叫び声をあげ、うめき、医療チームの努力をかたくなにしりぞけて、もうこれ以上痛い目にあわせないように懇願した。かけだしの臨床学生としての私の役目は、少女の火傷を負っていないほうの手をにぎって、できるだけ元気づけなだめながら、レジデントの外科医が、生命を失い化膿した皮膚繊維を、うず巻く水浴槽のなかですばやく引きはがすことができるようにすることであった。浴槽の水はすぐに淡い紅色に変わり、やがて濃い血の色に変わった。どのように扱ったらよいかおぼつかないまま、初心者の私は、この小さな患者がひどい苦痛に日々直面する精神的ショックから気をそらすように、ぎこちなくこころみたのであった。彼女がつねに苦痛に向けていた関心を、少しでもそらすことができるものならば、たとえば彼女の家庭のことや、家族のこと、学校のことなど、何についてでも私は話してみようとした。連日の恐ろしさに私はほとんど耐えられなかった。少女の叫び声、血液で汚れた水中にただよう生命を失った繊維、皮膚をはぎとられた肉、出血が止らない傷口、清潔にしたり包帯をしたりすることをめぐる戦い。そんなある日、やっと気持が通じるようになった。考えあぐね、自分の無知と無力に腹をたて、その小さな手をしっかりとつかむこと以外に何をしたらよいのかもおぼつかず、彼女の容赦のない苦しみに絶望したすえに、私は、その少女にたずねていたのである。あなたはどのように苦しみに耐えているのか、こんなにひどく火傷をして、連日連日ぞつとずるような外科的処置を受けるのはどんな気持のものか話してもらえないか、と。

彼女はかなり驚いた様子で、うめくのをやめ、変形のため表情を読み取ることも難しい顔でこちらをみつめ、それから、単刀直入な言葉づかいで私に語った。話しているあいだ、彼女は私の手をいっそう強く握りしめ、叫ぶことも、外科医や看護婦をしりぞけることもなかった。それからの日々、彼女の信頼は確かなものになり、自分がどんな経験をしているかという思いを私に伝えようとした。このリハビリテーション部門での私の実習が終了する頃には、この火傷を負った若い患者は創縁切除に見えてよく耐えられるようになっていた。しかし、私が少女に対してどんな影響を及ぼしたにしろ、彼女が私に与えた影響のほうがそれよりずっと大きかったのである。彼女は、患者のケアにおける貴重な教訓を私にもたらした。それは、苦痛の極にある患者とでも、実際におこっている病いの経験について語り合うことは可能であるということであり、その経験を整理するのに立ちあい、助力することが、治療的意味をもちうるということである。

(出典：アーサー・クラインマン『病いの語り』 誠信書房)

問1. 問題文(A)を読んで答えなさい。問題文(A)の下線部「二つの思考様式」を400字以内で説明せよ。

問2. 問題文(B)を読んで答えなさい。問題文(B)の下線部「彼女が私に与えた影響」を250字以内で説明せよ。

問3. 問題文(A)と問題文(B)の「主張」に適宜触れながら、あなたが、文化・人間情報学コースで行いたいと思っている研究における「あなたと研究対象とのかわり方」について説明しなさい。

文化・人間情報学 第2問 Question L2

以下の9つの用語から3つを選び、それぞれ10行程度で説明しなさい。英語で答えてもよい。1つの用語について1枚の解答用紙を使い、解答文のはじめに必ず選んだ記号と用語を記すこと。

- (a) ミュゼオグラフィー (museography)
- (b) イノベーションの普及 (diffusion of innovations)
- (c) エス・自我・超自我 (id, ego, and super-ego)
- (d) メディアはメッセージである (the medium is the message)
- (e) 科学的知識と歴史性 (scientific knowledge and its historicity)
- (f) 拡張現実 (augmented reality)
- (g) 多感覚 (multi-modal)
- (h) 社会的構成主義 (social constructivism)
- (i) インフォームド・コンセント (informed consent)